

山と博物館

第49巻 第11号 2004年11月25日

市立大町山岳博物館



松本方面から糸魚川に入る最後の峠、中山峠(標高205m)にて 文・写真 有川 劭

「塩の道」に関する二題

○太平洋から日本海「塩の道」四三〇kmを

歩いたこと(四月・六月の十六日間)

単純に太平洋——日本海まで歩くことに魅力を感じて参加を決めた。昔、塩が通ったという「塩の道」であった。今年、新潟・長野・静岡県沿線四八市町村加入の「日本海→太平洋塩の道連絡協議会」発足十周年と日本ウオーキング協会設立四〇周年記念事業として、静岡県相良町を出発。秋葉街道・青崩峠・小川路峠・飯田。伊那街道・塩尻・松本。六月に入り松本から糸魚川までの千国街道五日間の行程だった。

出発地点の相良町は徳川家康が若い頃この地に来た折りに地場産業のない土地に「塩を造った」と言っただけの始まりだという。その塩が青崩峠から信州に入り遠山谷・高遠・伊那・塩尻まで来たという。これを「南塩」といい、北国街道・千国街道から大町・松本・塩尻までの塩を「北越塩」というとのこと。

小谷村大網を流れる横川沿いから糸魚川に至る「塩の道」は、大網峠・粟峠・鳥越峠越えがあるが、このときは大網峠を一三一名の大人数で越えた。白池から雨飾山を眺め、六月六日に糸魚川の海岸に太平洋の海水を注いで完歩となった。充実した達成感があった。

○大町山岳博物館友の会本年度行事

「鳥越峠を行く」奮闘記

小谷村横川から県内唯一、海の見える戸土に通じる道が鳥越峠。この道は近年利用者が少なく、熊笹、葎に葛が覆い被さり、昔、越後から小谷温泉への湯治客の通り路でもあったというが、全くその面影がなかった。ナタ・カマ・ノコギリを持つての下見を重ねること四回にして、はつきりと道が現われた。峠の登り坂の繁ったヤブからうつ伏せの地蔵様が現われ感動的であった。ミカンとお神酒を献げ本番の無事を祈った。シヤガと雪椿の多い道だった。当日は晴天に恵まれ、青い空と海に白く浮ぶ船が見えたときの参加者の顔が忘れられない。

(大町山岳博物館友の会副会長)

千国古道と糸魚川街道

歴史の道の呼称のあり方(前)

小林 茂 喜

はじめに

「塩の道」と言うのと反射的に「千国街道」と口を吐いて出て来る。安曇地域では、塩の道といえど即ち千国街道であり、千国街道と言えど塩の道である。現に小谷村・白馬村・大町市の各教育委員会名で「塩の道・千国街道」と銘記された案内板は総て「塩の道・千国街道」と銘記されている。筆者もごく最近までそれに何の疑いも持たなかったし、自らも「千国街道」と表記していくつかの文章を書いた。

ところが、郡誌編纂のお手伝いで近世の様々な文書や文献を当たっているうちに「仁科街道」「越州往還」などの呼称は出てくるものの、「千国街道」と記した文書は一つもないことに気がついた。様々な論文においても街道呼称を使用する場合にも「糸魚川街道」を使うのが通例であり、極近年のものをのぞいて「千国街道」を用いるものは一つもなかった。それなのになぜ「千国街道」なのであるのか。「塩の道・千国街道」のままでいいのだろうか。そういう疑問がこの小文の出発点である。

一 千国古道と千国道

(一) 古代の「塩の道」

宮本常一によれば、古代には、沿岸部から川を遡って内陸部への道は総て塩の道であった。初めは山の中に住んでいる人々が海岸まで出かけて行き、そこで塩を焼いて奥へ帰って来た。海岸部で発見される縄文土器の幾種類かはそういう製塩土器であると言う。そのようにして踏み分けられたものが最初の塩の道であった。やがて塩の生産量が多くなると、沿岸部の人々が塩を自分達で売り歩くようになる。最初

は人の背で、やがては牛の背につけて。従って、我が長野県の関係で言えば、直江津

や高田から飯山や長野への道も、蒲原から鯉沢を通って上諏訪への道も、糸魚川からの道と同様に塩の道であった。「小谷民俗誌」(小谷村教育委員会編・昭和五四年・第一法規出版)によると、戸土の近く仲又地籍には縄文中期の石斧や土器が発見されていると言うし、横川からは土師器や須恵器が発見されていると言う。つまり原始から中世に続く集落遺跡が古い塩の道に沿って点在しているのである。一方内陸に目を向けてみてもまた面白いことが判る。

大町市海ノ口の一津遺跡(昭和六二年発掘)は古代のむすい加工場と考えられているが、これは姫川流域と内陸部が縄文時代(晩期)に日常的な交易関係を持っていたことを物語っており、当然のことながら古代において、塩やむすいを中心とする交易の道があったことを裏付けている。この交易の道は、やがて安曇氏が沿岸部から信濃へと入る開拓の道・政治の道としても利用されることとなる。

(二) 千国庄

古代に越後から信濃に通ずる主要道(官道)が通っていた可能性があることは、三坂峠(大峠)の存在に依って類推されている。三坂は御坂に通じ、官道の主要な峠にのみ称せられたからである。しかしこのような主要道が存在したとしてもこの段階でその道を「千国」道と呼ぶことはできない。また千国が存在していないからである。中世に至ると、千国道関係の資料は確かなる。一つは、六条院領千国の庄の存在である。「吾妻鏡」(文治二年(一一八六)三月一二日の条に「六条院千国庄」)とあり、次いで建久元年(一一九〇)の僧某の下

「下す 六条院御領 信乃国千国御庄内

於多里飯守の所(以下略)」とあって、六十反の年貢布(芋麻かと思われる)を早く納めるようにとの督促の文書である。平安時代の末期には小谷に千国庄があり、於多里(小谷)は飯守(飯森)と共にその千国庄の地域であったことが知られる。

六条院領は、白河天皇の皇女姫子内親王(郁芳門院)の御所「六条院」に由来するという。女院の没後、御所を持仏堂とし、その経営にあてた所領である。所領は白河上皇から鳥羽・後白河・後鳥羽と伝わり、承久の乱によって鎌倉幕府に没収されている(後に返却され室町院領となる)。六条院の造営は承保二年(一一七五)であり、女院の没年は永長元年(一一九六)である。六条院領は建久年間(一一九〇)頃には荒廃甚だしい所領もあつたと言うから、早ければ没後間もない頃の十一世紀末、遅くとも平安時代末期の十二世紀後半末葉には千国庄は六条院領として成立していたものと考えられる。

どういう経緯で六条院領となつたかは明らかではないが、おそらく仁科御厨や仁科の庄の成立(即ち仁科氏の台頭と活躍)と密接な関係にあるものと考えられる。

この千国の庄の範囲がどのあたりであるか正確なところは判らない。小谷民俗誌は、凡そ今日の小谷村全域と白馬村を含む範囲であつたと推定している。先の僧某の下文にも飯守(森)が千国の庄内と記されている所から考えれば妥当な見解であり、於多里と共に飯守が千国の庄の内重要な場所であつたことが推定される。

ところで江戸時代の中後期、この地方の中心である大町村に次いで人口が多かつたのは千国村であり、次いで土谷村であつた(ちなみに安政二年、大町村二千七百余人、千国村・土谷村共に千八百余人)。千国は近世においても山中(小谷)の中心であり、この地方の人々にとって特別に意識される場所であつたわけである。

私達は今日の政治的・地理的・経済的感覚を以て山間地を即ち僻地僻村の地であると考えがちであるが、それは平地水田農業が農業の中心であるという近代の感覚である。平地水田農業は灌漑用水路を切り開く治水土木技術と政治権力の

登場を待って初めて可能となつた言わば「近代的」な生産形態であり、それが可能となつた戦国時代においても、大規模な戦乱を避け治安を維持するというもう一つの目的から見て、山間地は生活の適地であつたわけである。

いずれにしても、平安時代の末期に、千国を中心に現白馬村から小谷村に至る一帯に千国の庄が営まれていた。政所はどこに置かれていたか明らかではないけれども、枝郷を含む後の千国村のどこかにあつた筈である。道の呼称は最終的な目的地の名を以て呼ぶことが通例であるから、この千国の庄が存在した時代の幹道は政所千国を目的地として「千国道」と呼ばれていたことは確かであろう。

先に見たように、千国庄成立以前にも古い道筋は南北に通じていたので、仮にそれを「千国古道」と呼んでおく。古代の千国古道と中世の千国道とは多くの点で共通すると考えられるが証明できるだけの事実を持っていない。ただ、歴史的・社会的な背景から、一応分けて考察されなければならないということである。

その後千国の庄がどうなつたか明らかではないが、長享二年(一四八八)の「下社春秋之宮造宮之次第第二諏訪氏文書・信濃史料」に五間拜殿の担当役所として「千国・小谷」と見えているところから、長享頃にはもう荘園ではなくなつていたのであろう(同じ文書の同項に「平原庄」・「矢原庄」は見える)。

(三) 三宮穂高社御造宮定日記

「三宮穂高社御造宮定日記」(信濃史料)は、文明十五年(一四八三)から天正十三年(一五八五)に至る約百年間の造宮に関する記録であるが、この中に穂高神社の四至境に関して次のように触れられている。

穂高の領四至界ノ事 東ハ千国大道ヲサカ
フ 南ハ柏原新居ノ沢ヲサカフ(後略)

これによつて中世の室町時代中期の穂高の人々は、神社の東域を南下する幹線道を「千国大道」のように呼び習わしていたことがわかる。この文言は天正十三年まで八回に亘つて殆ど変わりがない。慣用的に使われていたものと考え

られることから、天正年代にもこの地域の人人が「千国大道」の様に呼んでいたとは必ずしも言えないものの、少なくともそう呼んで判らなくなるような状態ではなかったことだけは確かなことであろう。すると近世初頭までは、南北安曇の各地に「千国道」と呼ばれる道路が存在し、その中の幹線道路を特に「天道」のように呼んでいたと考えてよいことになる。

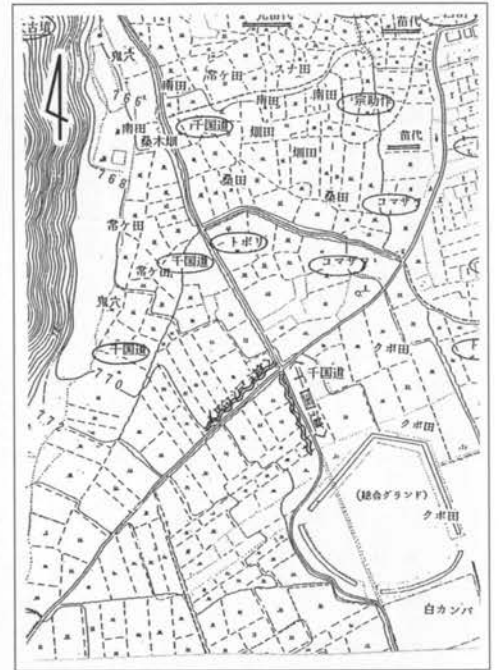
それではその千国道は、どのあたりをどのように通っていたものであろうか。

南安曇郡誌(二巻上)によれば、千国道と伝承される道は次の四本あるという。

- 1 単穴から小岩嶽・牧を経て岩原から田多井に出、小倉・小室・大久保・寺家を経て花見から焼山に至る道筋。
 - 2 立足から古厩を経て貝梅から穂高に入り、柏原・下堀金・上堀金・楡・下角影を通過して立田に至る道筋。
 - 3 前出2の貝梅から等々力に出て矢原・細萱・唐笠木(吉野)・中萱を経て一日市場・七日市場に至る道筋。
 - 4 前出3の矢原から重柳に出て踏入・寺所・中曾根を経て飯田・熊倉に至る道筋。
- このうち3・4は2のバリエーションルートと考えるとよく、大きく分ければ二本の道筋があったことになる。4の道筋は犀川を渡った後、養老坂を越えて岡田へ出、国府の置かれた府中(松本)へと通じており中世後期までには存在したと考えられるが、4の道が通る集落はいずれも荘園制時代の成立であることから、古代にはなかったと推測される。

前記のうち1が最も古い道筋であると考えられるが、これは原始以来の交易の道の発展した姿と解され、千国の庄が成立する時代の道としては、先の「大道」の通っていた場所からしても、2の道筋が幹線として最も主要な役割を果たしていたものと考えられる。

ただし、後にも見るようになるように、この道は後の(近世の)糸魚川・松本を結ぶ流通の道とは基本的に異なるものと考えられる。



(四)地名に残る千国道

旧平小学校(大町市平)の西に市営野球場がある。この野球場を北から南に突っ切って一本の道が通っていた。現在は野球場にさえぎられて西へ迂回している。この付近に「千国道」という地名がいくつも見られる。木崎湖の西南にあたる場所であり、付近には仁科城址、阿部神社等仁科氏関係の史跡がある。(略図参照)従って千国道がある時代には千国道は木崎湖の西岸を通過して南下していたことが判る。この千国道地名は、かつての五か村原(現在の大原)地籍にも点在している。千国道は木崎湖西岸から大原を通り野口の中村から久保のあたりに出て高瀬川を伝へると渡りそこから南下していたものと推測される。

(五)伝承の中の千国道

前項で、古い千国道は木崎湖の西岸を通過していたことが地名により明らかであることを述べた。これには伝承もあり、また古い道型も残っている。

西海ノ口の平林幹嘉氏(平成一六年現在七五才)によれば、古い千国道は西海ノ口集落の西方高台を通過して森集落西方へと南下していたという。

平林氏は農業の傍ら、若い頃から熊・猪等の

狩猟に従事し、明治期から昭和三十年代まで行われていた西海ノ口の石灰生産地域の保全にも力を尽くす等文化財や歴史的遺物にも関心の深い人物である。

筆者は過日、氏の案内によりその古い千国道を実際に踏査してみた。西海ノ口集落西方で集落のはるか高い所を通過している千国道は、やがて湖の際に出て、現在の道路よりおよそ十五メートルほど高い地点をほぼ等高線に沿うようにして辿り、湖の南岸水田

地帯へと続いている。この道は昭和二十年代に復元を意図して整備されたためか、道型ははっきり残っており、現在も荷物を積んだ牛一頭がゆっくり通れる程度の道幅はある。

また、地域の文化の保全・興隆に功績のあった榊葉太生(松川村板取)は北安曇郡郷土誌稿の中で次のように述べている。

最も古い千国街道は常盤村の鉄ヶ峰の西善光寺平から親流を伝って乳川に出、牛首を越えて松川村に入り、雨引の尾根を伝って小芦間を下り、馬羅尾から野辺沢を通過して宮城に出たものだとはいはれている。

(北安曇郡郷土誌稿「第二冊二六三頁」)

ここで榊葉太生が「千国街道」と言っていることの妥当性については後述するとして、今五万分の一の地形図を見ると、前越平より親流と雨引山と唐沢山との間の鞍部より野辺沢宮城は、谷や鞍部がほぼ南北に連なっており、ときれとぎれに道がついている。伝(中)上(手)地籍から西前越平に登る道も途中までは車がかれる道となっている。したがってここに何らかの道筋がついていても不思議ではない。しかし乳川支流の谷に入るのにわざわざ西前越平に登って親流を下る必要はないし、宮城に出るのに、西に迂回して高い山の尾根を越える必要もない。古代においては、高瀬川・乳川・芦間川など大大河

川の氾濫が道や集落の形成を阻む最大の要因であったことからすれば、それを避けようとしたと考えられなくもないが、それにしても、その道筋をたどる方が山麓をたどるより通行上はるかに困難であるように思われる。

某氏によれば、榊葉太生は古代においては安曇野が湖であったことを事実と信じていたと言っており、そのあたりから導き出された考えであるかもしれない。ここでは榊葉太生によってそういう伝承が記録されているという紹介だけしておく。

二、千国道筋の変遷と糸魚川街道

以上のような考察に立つと、千国道筋についてはおよそ次のような歴史的経過を辿ることができるようになる。

(一)「千国道」の呼称は千国庄が成立してからのことであるが、後世「千国道」と呼ばれるような越の国から南北安曇を縦断する道筋は古代から存在した。

(二)近世初頭頃までは、千国道は大町近辺は木崎湖の西を通過し、大原野口から伝へて山麓に沿って南下して行く道が幹線であった。

(三)南安曇では、千国道は大別して、多田井から焼山へと続く道筋と、穂高へ出た後一日市場方面へ続く道の二筋あり、後代になるにつれ、さまざまなバリエーションルートができたものと想像される。

ところで大町市の常盤に「沓掛」がある。

沓掛は古代の交通路に分布する地名として夙に有名である。駅の所在を示すとも言われているが、多くは峠の前や坂道に差しかかった所に分布している様である。急峻な坂道や峠を越えるのに、その場所でも馬に沓を履き替えさせた、あるいは履き替えさせる為の沓が掛けられていたという(長野県の地名とその由来)松崎岩夫、他。

とすればここには駅があった可能性があり、則ち先に見た千国古道が通っていたということになる。

大町市の常盤から松川村に至る集落や耕地の

形成は、用水堰の取水状況や展開形態から見て、いずれも中世以前には測れないと考えられる。古代・中世においては、沢水を利用できる山麓や、微高地安定面の取水可能な一部をのぞいて、その殆どが高瀬川の分流や小山林を点在させる原野か氾濫原状の荒地であったと想像される。そう考えると、この地に駅があり古代の主要路が南北に通じていたと考えることにはいささか無理があるように思われる。

しかし「沓掛」地名が残っていることは確かな事実である。そこで想像をたくましくして次のように考えてみる。すなわち沓掛をはさんだ高瀬川の対岸には仁科神明宮があり、言うまでもなく仁科御厨・仁科荘経営の重要地である。御厨の成立や荘園の経営それ自体は後代のことになるけれども、仁科氏が阿部氏に出自を持つとされていることを考えると、阿部氏がここに進出した時代に千国古道に通ずる道路を必要とし宿駅の機能を持った施設を設置してこれを「沓掛」と呼んだということである。

しかしこれでは「沓掛」が幹線道路にあつたという定説と矛盾する。もし、事実ここを古代の主要路が南下していたとすれば、古代に於て既に千国道は三筋程度の道筋を持つており、しかもそのうちの幹線は中央部を通つていたと解釈するより仕方がない。この点は今後追究していかねばならない問題点である。

先に見た六条院領千国庄は、後に室町院領となり、やがてその実態は消滅していくのであるが、いずれにしても近世初頭までこの地域を南北に縦貫する主要路が「千国道」と呼び慣わされていたことは疑いのないところであろう。

但しいずれであったとしても、どれも後の越後道(糸魚川街道)の道筋とは大きく異なる。近世の主要な道筋は、後に詳しく見るように、中世後期から近世にかけて成立した集落を結びつた大町から東部山麓を辿り、池田・保高・新田(豊科)・松本という経路をたどるからである。

つまり、中世から近世にかけて、特に中世末期頃に、南北を結ぶ道筋に利用度や利便上の変化が生じたわけである。

いまこの変化の実情を説明する明確な事実は持ちあわせていないけれども、この道筋に変化をもたらした要因は、一つは戦乱(南北朝・戦国)であり一つは流通・運輸の発達であろうと推測する。勿論その背景には長大な用水堰の開鑿による沖積地の開発と集落形成がある。古い千国道は、南北朝から戦国期にかけて、軍事輸送的な側面から必要に応じて改修されついで替えられ、特に大町から南では、政治・経済の中心である府中(松本)を目的地として変遷し、近世を迎えたものと思われる。従つて、現在まで続く集落が成立してくる戦国末期には、後に「糸魚川街道」と呼ばれるような近世の道の主要部分はでき上がつていたと考えてよいであろう。そのように主要な道筋が換り、やがて江戸時代に入って糸魚川との交易が盛んになると「千国道」という呼び名は次第に忘れ去られ、目的地である越後や糸魚川が街道の頭に冠せられるようになったものと考えられる。

三 近世の塩の道

(一) 信州問屋由緒録

「塩の道」と言うことがことさらに言われるようになったのは、近世においてこの道を糸魚川からの地塩が大量に信州へと上つたからである。延享元年(一七四四)に出された松本領口留番所并穀留・南塩禁止触(「泉史史料編第五卷(二)一一二〇)では、

信州松本領出口、古来より口留南北有之、米穀松本城下へ他領より一切入不申、并南塩は又番所内へ停止、北国塩用候儀古例ニ御座候

と、松本領では古くから南塩の移入が禁止されていたことを記している(同様史料は元禄年間にもある)。南塩禁止の確かな根拠(理由)は明確ではない。

「信州問屋由緒録」(信濃史料叢書二四巻、寛政七年、糸魚川信州問屋・町澤藤右衛門記)はこれを戦国時代末期の事とし、

「四方敵に取囲海浜知たまはず、塩味の由御こまり、信州国中之民百姓可及渴命之由追々城代より願出 云々」

と、武田方について信州が塩の供給に困つて信玄に訴え、信玄がそれを謙信に頼んで糸魚川の塩が信州に持ち込まれるようになったとしている。今に伝わる塩市(館市)の起理由緒である。由緒録は続いて

「其格別を以彼国ニハ夫より己来御地頭江塩年貢を松本領主御取り被成候根元者是也」

と述べていわゆる塩運上(年貢)がこの時始つたとしている。事実この通りのことがあつたかどうか確かめる術はない。物事は総て大げさに解釈されて喧伝され、やがて伝説化していくことを考えれば、信玄が直接謙信に頼み謙信がそれに応じて塩を送ることを命じたというのは、やや誇大な表現であるように思われる。しかし「政治(戦)と経済(送塩)は別に考えよう」というような暗黙の合意が両者の間にあつた可能性は十分ある。天正二年戊八月の謙信判物「兩御関所御方式御条目」(前出「由緒録」中の文書)に、武器や馬具を通してはならないとか、武士体のものでの通行を禁ずるとか町人でも脇差しを帯びてはならないとかいう条項があることがそれを物語つていふと言えよう。

従つて、この時になつて始めて糸魚川の塩が信州に持ち込まれたというのではなく、これ以前から小谷などの百姓が越後へ塩を買いに出していたものが規制されることなく、こうした御条目が出されることによつてむしろ公的な承認を得るような形となり、以後の移入量増大に結び付いていつたと考えるのが、より実情に近いのではないだろうか。

近世の糸魚川街道は、糸魚川から松本までの道であり、小谷以北においては、虫川を通る姫川西岸の道と、山口を通る山中の道とに別れ、山口を通る道は更に大綱峠越えの道と大峠・地蔵峠越えの道とに分れた。南下すると、中綱を過ぎた後木崎湖の東岸を辿り、大町から南は八郷を通つて池田に出る道が幹線である。池田からは林中を通つて川合神社の東辺を辿り、高瀬川の海道橋を渡つて立足へと出る。

(二) 北塩の起点と終点

いずれにしても重要なことは、近世の塩の移入には糸魚川の有力者(商人)が密接に関わつていた。北塩とは則ち糸魚川の地塩であつて、その起点は糸魚川であり、その終点は塩年貢を松本御領主御取被成候根元」というように、松本であった。ここに糸魚川と松本を結ぶ近世の塩の道が明確に出現したと言つてよい。

その後江戸時代を通じて四十集(あいも)の(五十集(いさば)と呼ばれる肴類や更に反魂丹、笠類、輪島漆器類など様々な商品が糸魚川から運びこまれるようになる。北前船(北国廻船)が隆盛となる江戸時代後期には更に流通は拡大する。その起点はやはり糸魚川であり終点は松本であった。従つて近世の塩の道は即ち流通の道であり経済の道であつたと言える。

塩の呼称が基本的には目的地を意識してつけられることを考えれば、信州側から見れば「越後道」「糸魚川道」と呼ばれ、糸魚川側から見れば「信州道」「松本道」と呼ばれるのが本来の姿であつて、何か他の特殊な事情や理由がない限りこの原則は崩れないものと考えられる。

ただ近世の塩の道は、中世において「千国道」と呼ばれた道をも辿つたため、「千国道」とよぶ慣行がしばらくは続いたのではないかとと思われる。やがて流通が拡大する江戸時代の中期頃までは特定の場所をのぞいて殆ど消滅するに至ることは後に述べる通りである。そこで、道標を含め、当時の文献においてはこのように記録されていたかを次に検討してみることとする。

(信濃史学会会員) (つづく)

山と博物館 第49巻 第11号

発行 二〇〇四年十一月二十五日発行

〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-113-0111

FAX 〇二六-113-1111

E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp

印刷 株式会社印刷

定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇-7113393